



ありました。一番薫陶を受けたのは、高橋政知さんといって、東京デイズ ニーランドをつくった方です。デイズ ニーランド建設のため、本来であれば10年以上かかる浦安の土地開発を、高橋さんはたったの3年でクリアしたので。高橋さんが56歳で私が20歳のときにお会いしました。高橋さんは私に「限界を試し」と言いました。私がスケートで一層頑張るようになったのは、高橋さんとの出会いがあったからです。私は人生とは「人と人との出会い」だと思っています。スケートをやることになったのは富田先生との出会いがあったからです。あとは応援、激励してく

れる人です。おふくろや仕事を紹介してくれた遠藤先生、デイズニーランドをつくった高橋さん、こうした人たちと出会うことができて本当に良かったと思います。この出会いがなければ、今日の私はいません。

——ありがとうございます。最後に、今の伊賀さんの夢は何ですか。

伊賀.. 私は「日本床の間保存会」の会長を務めておりますが、日本の各家庭に床の間が再現されるのが夢です。今は、ほとんどの家に床の間がありません。ですが、床の間というのは、日本文化の基本中の基本なんです。江戸時代には、元服の式が床の間で行われていました。外国の方は「日本は家の中に美術館がある」と言って驚きます。何を言っているのかというと「床の間」のことを言っているのです。床の間に絵が掛けられ、陶芸や刀が飾ってあり、書院がある。すごくおしゃれだと言っている。日本の文化に興味を持っている外国の方はたくさんいます。ですから、床の間を日本人として誇りに思える、こうした日本の風情を大切にしていきたいと思っています。

もう一つは、アマチュアスポーツ基金(以下、アマスポ基金)の設立です。「全日本アマチュアスポーツ支援プロジェクト」というものを立ち

上げて、アマスポ基金の設立に向けて、署名活動をしています。アマスポ基金というのは、スポーツ選手の年金制度です。たとえば、砲丸投げや走り幅跳びといったマイナースポーツの選手が、将来アマスポ基金から年金がもらえるようになると、メジャースポーツ選手もマイナースポーツ選手も同等になるんです。年金の金額は一緒ですから。そうするとマイナースポーツをやる選手も増えるし、夢が持てる。今はスポーツで企業に就職しても引退後に同じ企業にいられる選手は一握りです。引退後に新たな就職先が見つからなかったり、就職先が見つかったとしても収入が

減ってしまうという方が大勢いるのです。スポーツで企業に就職し、何十年もそればかりやっていますから、スポーツ以外にできることがない。プロ野球の選手でもそうですよね。そういう方々を救う必要があります。また、スポーツの指導者もそうです。ボランティアでやっている方がたくさんいますから、指導者もアマスポ基金で年金がもらえるようにするのはいいです。そうすると、スポーツにもっと夢が広がりますよね。日本卓球連盟や水泳連盟の方にも署名をしていただきました。白糠にも署名簿を持っていきますので、そのときは皆さんもぜひ署名してください。



公民館の2階には「孔雀画廊美術書コーナー」が設置されています。伊賀さんから寄贈された美術全集がたくさん展示されていますので、ぜひご覧ください。